

第6 「稔りの秋を迎える」 —平成7年秋（9月・10月・11月）—

1 「答申」と「提言」

芦屋市立図書館協議会の開催は、この年度2回と限定されていた。8月30日に続き、9月4日、第2回協議会が開催された。3月30日に提出された答申は、人・本・施設の3要素について芦屋市立図書館の将来像を示していたが、この日、このうち特に「施設」に焦点を当てて、「提言」をまとめられたのである。すなわち、文化復興を見越して、図書館南北2拠点方式を明確にし、JR芦屋駅周辺に北部の拠点を、と提言されたのである。10月7日の教育委員会協議会において、「答申」と「提言」の趣旨説明が行われている。

これを受けて、社会教育部（図書館）は図書館システムを立案し、「北部図書館設置計画書」をまとめた。行財政の緊急事態の下、「北部図書館設置計画」そのものは採択にならなかったが、その発想を生かして、大原分室を充実することが望ましいとされたのである。

2 行事

年中行事になっていた「親子で楽しむお話の会」は復活し、11月5日に開催された。図書館秋の講座も取りやめることなく、11月8日と21日に開催された。

例年春には、副読本で学んだことを実地に知るため、そして図書館利用を身につけるため、小学校3年生の図書館見学が行われていた。しかし、この年の5月は、これを実施できる状態ではなかった。とは言え、なんとかして今年の3年生も歓迎したかった。図書館側と学校側、双方の熱意が実り、見学会は10月から11月にかけて実現したのである。

地元神戸新聞社主催の「パネル写真年末巡回展」は、この年、どこにも会場を見い出せない苦境にあった。それも今回のテーマは「阪神大震災」であり、多くの人々に見てもらいたい意味があった。相談の結果、芦屋市立図書館を会場にすることとなり、11月28日-30日に開催されたのである。この展示会は、図らずも1月に図書館が主催することとなる震災展の前奏曲となった。

3 市民協力

公民館グループが芦屋市立公民館と共同主催する「本の交換会」は、ようやく定着しようとしていた。回を追うごとに好評で、集散する本の量も増える一方である。芦屋市立図書館もこれに協力してきたが、期間中に行われた交換会記念の「ティタイム・セミナー」（10月16日）にも、図書館から出講した。

なお、震災により臨時休室していた公民館図書室は、9月1日に再開した。

「折り紙教室」も歴史のある行事であったが、とくに震災後、多大の課題をかかえる図書館にとって、継続することが困難な行事であった。ここでも又、市民

の熱意が盛り上がり、この人気高い行事は、講師・世話人のボランティアによって、自主運営行事として甦ることとなったのである。（再開の日、9月13日。）以来、従前と変わらぬ活況を呈している。

4 激励

作家の村上春樹氏は、芦屋市立精道中学校の出身者である。旧図書館（現打出分室）の熱心な利用者であった氏は、出身地の大地震の報に接し、激励のため、出版社とともに、自作作品の朗読会を企画されたのである。発表後すぐに満席となった朗読会は、9月10日（日）午後、地元の芦屋大学で開催され、好評であった。この日の午前中、伊勢町の新図書館に来訪、9月10日は芦屋市立図書館にとって記念すべき日となった。

同じ精道中学校出身で市内在住、ご家族ともども図書館の熱心な利用者である映画監督の大森一樹氏からも、激励を受けた。ロードショー前の自作最新作品の特別鑑賞会を企画され、11月8日、JR駅前「山村サロン」で開催され、自らもスピーチを引き受けるなど、会の成功に寄与された。

両氏とも売上金に自らも積み上げられ、「図書館資料の充実」のためにご寄贈くださったのである。

5 来訪

11月はなんと多くの人々の来訪を見たことであろう。

兵庫県教育委員会の「避難所となった社会教育機関実態調査」のため、委託を受けた大学研究所のメンバーが来館した（11月25日）。独自に震災時の「避難所経営」を調査する京都の大学の研究室からも来館した（11月27日）。

関東地方の自治体から防災研究チームが来芦し、図書館を拠点に調査活動に従事された（11月10日）。

11月24日には、逆に芦屋大学を訪問した。芦屋市教育委員会社会教育部が、かねてから「市民公開講座」のために多大のご協力を頂いているところであり、丁度寄贈する図書もあったので、図書館長が小笠原暁学長にお会いし、双方の図書館の交流など相談したのであった。

ハートフル公社が主催する「福祉調査団」がスウェーデンを訪問したさい、ホームステイした先が、チェーピング市立図書館のセーグルシュトゥルム館長宅であったというご縁で、館長ご夫妻が海外旅行休暇の途次、芦屋を訪問し、是非図書館を視察したいとの意向である。来館された11月29日は、丁度居合わせた小学生たちと交歓するなど、珍しくも有意義な日となった。ご夫妻をエスコートされた市民の方から、翌日図書館に届けられた贈り物「ポインセチア」の鉢植えは、それ以来ずっと赤々と燃えたと、来館者に頬笑みかけている。

11月の末に、八戸市民ボランティア会のメンバーから、自家農園で収穫した林檎の香りが2箱も届けられ、関係の所にお分けてきたのも嬉しい出来事であった。

1月に予定する「阪神大震災資料展示会」計画が公表されるや、次々に記者の取材を受けたのも11月のことであった。

6 資料

(1) みんなの本だな9月号巻頭言

◆ 今を自覚する 歴史的な季節感 ◆

2月、3月の空白のあと復活した4月号から、一見季節感のないメッセージを届けて、もはや9月を迎えます。この間、足下に注意して路を拾う毎日が続きました。図書館から北へ伸びるコミュニティ道路をはじめ、日々段差を生じ広げていく歩道に踏まないように、そして行き交う蟻を踏まないように。

震災の厳寒を凌ぎ、復興の炎暑を乗り切る歴史的な季節感を自覚する、息長い文化観を持ちたいと思います。

(2) みんなの本だな10月号巻頭言

◆ あふれる善意に包まれて ◆

再会が待ち望まれていた、図書館の「折り紙教室」が、講師と参加者のご厚意により、自主運営行事として、9月から甦りました。手先の文化を象徴するこの芸術が、この国で脈々と受け継がれて、今、震災復興過程の一つの心の支えにもなっているでしょう。

何事によらず落ち込みがちなこのごろ、利用のマナーへの協力がむしろふえていくように思えます。そのおかげで図書館が日々運営できる喜びを覚えています。

(3) みんなの本だな11月号巻頭言

◆ 着実に進む国際交流 ◆

船舶の技術要員リカレント教育のため、東南アジアからの85人の留学生が、10月上旬から12月上旬にかけて、呉川町の運輸省立海技大学校で学んでいます。芦屋市立図書館に迎えること5年目、10月12日の見学会のあと毎日のように留学生が図書館を訪れています。

かつての卒業生が、航海中日本に寄港したさい、海技大学校へ大震災の見舞に立ち寄ってくれたという話に、心を動かされます。